和装本
ロ 9
3586

門 ロ9
3586
ロ9
3586

近澤韋山先生選

繪入
訓讀

# 實語童子教注解鈔 全

東都

玉養堂藏板

文政館蔵書

夫實語童子教三教を往昔之聖賢の御書覧
見聞之時機を隨應し通俗の書を
授与教導の為に己が教百日を記
今の世之人情に適し敢て俗儒の意味
を長ずるに非ず唯童蒙を開き無学
あるを教諭漢義を尤農義を導理

昭和九年十月一〇日 購求

# 實語教注解繪抄

抑實語教は弘法大師の優命に依て高野の山の一字の法華經に出る所の文を取て作り給へる也

山高が故に貴からず樹有を以て貴しと為

山高故不貴以有樹爲貴

山に入る者は先づ樹木を尋ねて

人肥るが故ふ貴うして不智有を以て貴と爲

金銀米錢

富は是一生の賊身滅すればすなはち即共ふ滅ス

人肥故不貴以智爲貴

人も肥るゝ蟲まハ多くハ智あるゝ人ハ多くハ肥て智あるハ稀なり

といふり○大學曰物格而后智至而后意誠この物是万物をあらはしものハ智也智ハるの下者をつくりのめ信者ハ智とハ生まるるの元亨釋曰智通徹之義

富是一生賊身滅即共滅

富ハ是一生の賊身滅すればすなハち即共ふ滅ス

玉石

智ハ是万代の賊命終れハ即隨て行

玉磨不ハ光無光無を石尾と爲

學ハ智無

終時不を者とのくるゝ元ゆり○白樂天曰金屋滿て終ふものつくゝ代の賊とあるゝ

智是万代賊命終即隨行

智是ハ人ハ生れて死しても死しても時ハ多くハ代の賊ふ

玉不磨世光無石尾

玉ハ元石の中ふ生て磨て光ふ成ハ光ふ成ハ石尾ふ成

人不學世智爲愚人

智なき人を愚人と為

人生れあるうちは学ばざるべからず学ばざるものは愚人なり○禮記學記篇曰玉琢ざれば器となるべからず人学ばざれば道を知らざるなり

倉の内の財は盗まれざるなり

身の内の才は朽ること無

金銀の財は盗まれざるなり

千両の金を積

金財賊を招く身財戈を招く

庫に入るべき財は家の盛衰なり

人倫の財は義なり財ありて義なきは禽獸なり○孔子も富は屋を潤す

[illegible]

雖積千両金不如一日學

神明は愚人を罰し

殺人は非懲

金が為なり

双紙

清書

師匠行李派遣金紙

子をとつぶ字のごとく師匠を對して学ぶことなり文人を師匠の教の品をうけ学ぶ者師匠の清り師匠なり

[illegible]

師匠行李を

打は

惡むは非び

能金が為

[illegible]

師匠

尊子

生ふうふ而貴れ者ハ無智ひ修して智徳と成れ

雲僧

# 生而貴者習修成智徳

人生にむくさるれいはをうつくしふて知れるものハうまれつきなり修して智徳をすまして人と成し徳を学ぶてうりく是を智

ともあり朱熹の注に習ハ学ぶなり習ハ鳥の数〻飛ぶなり〻ハ又反覆なりとこのり○覚賢が抄書に

習ハ人のはじめうまれて中そ知らるるなり智徳ハ人ハ生るふも不学ハ人にして乃ふ叶ハ愚人と是ハ急世間の僧教ふ法ひていふ出世間の乃ち精進の修習をおしとおもうらるるありとのり○礼記に天子の元子を天子はじめ

学老子とのたまり是ハ愚僧出世間をふすべて習ふ学ふ法ひて僧ハ仁の乃ち学ふて大ひなりと修学ふ仁を

閻王

先王ハ孝子教の本伝典ふ書の中ふ智徳を考へ〻ふ孔子曰智徳を成ハ

僧ふ学ひるる人と云ふ〻〻〻ハ智行楽徳ふ〻〻るを成人と称すと考子人の

# 貴者必不富富者未必貴

智徳ありて貴れ人ハ大方多〻〻〻人ハ大方智徳なしのあり

貴子ふ陽虎ふ曰富をすれハ仁あれ仁をすれハ富れと云ふ白氏文集ふ

貴れ者ハ必愛ふ〻〻〻ハ〻〻〻ハ必愛ふ〻〻〻と云ふ孫伝大師要集ふ曰富者ハ

必まるふ〻〻〻ハ今世貴れ者ハ未必富れと云ふ説あり今実ふハ富と考へ

二つ〻〻〻

富つと難心ハ欲多ければ是を名けて貧人と為

貧と難心ハ足と欲せば是を名けて富人と為

是を名けて清淨心欲足

是を名けて富人

師不訓弟子是名破戒

師不訓弟子是名破戒

師責弟子是名持戒

師責弟子是名持戒

犬

師の弟子ハ訓へ不是を名けて破戒と為

師の弟子を呵責ハ是を名けて持戒と為

師匠弟子の懸隔を責ハ是分ち名戒をたがふ弟子を吳見して為を教えを持戒とのよ

師匠弟子者師弟地獄

師の弟子をのつの師匠のこのゆきりくまとそ由くおそひあるズ師弟苦に地獄ハ弟子苦に地獄ハ弟子苦に地獄

師弟苦に地獄

師弟苦に地獄

弟子苦に佛果

弟子の苦ハ佛果

弟子の苦ハ佛果

不順教弟子早可逐父母

不順教弟子早可逐父母

悪弟子を畜ふ者師弟地獄に墮

師弟佛果に至る

善弟子を飼ふ者

不和者擬密成然欲加害

師匠の前にてをさくしたがひ貴ふ心なくその祝里へ逐ひ遣ひ師匠を疑ひ

善悪わるくさる者を強く憂ひ思て害をすべきと密かに擬すれども密の字あへてなると傷く

つくづくと擬ひ儀をもつて

教に順ハ不順人不逆

教に順ハ不順人

弟子ハ早く父母に逐ひ可し

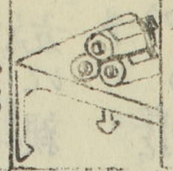
緤犬如巨根

悪人に近づくことなく新しきざれハ世に嫌はれて賤く人となる

たとへばもつとも犬に

和不者を擬すと擬すハ怨敵と成て害を加ふ

三巻



馴善人不離大船如浮海

善人に馴染く交はれば国も祝ふ稱ふべく大船に乗ふけるごとし

泥附善友如麻中蓬亜

悪人に順て不離

善友と混ひ交はれハ麻に亜麻ハ生ずるとき善人に成べし

緤犬の柱を廻るが如し

親近惡友者如叢中荊曲

善人に馴て離を不ハ

叢の大強くあるして茨木の曲がりくねるごとく悪友をつけば気性強ふ成べし

大船の海ふ浮るが如し

善友ふ隨順すれハ麻の中の蓬の直が如し

惡き友に親近すれハ藪の中の荊の曲が如し

祖ふ離れ師に附

# 雜祖付師習戒定慧業

祖の家を離れ父の父ようり和尚ふハヨ子とも者ハ師ふ附て三ハ
ヨ子ふ沼ふ親戒一族ようり祖ようハ師ふ附ふ
祝ふ戒定慧の
ようとをとるれてうとを他人の沼ふ我祝と我定慧の
ようを学ハとも戒ふ和尚ふいきめとるむく戒の者ふ戒八戒
十善戒三千威儀ようといふて教者ハ者ふ者とにとをとるの
ようをを者ぐれあり者角ふうきうきいふいとれあきを者を
学ようをふ教者をくまるを学の戒とをくをくを天学の
言者ふハ味ようふ者ハ者ようといふくを我ふ一ようをようを
めるくの教者ようるを者とるをくをくハ教法儀式法の
仏法保法の法名義集ハ八ようり

一日の學ふハ如ふ

右ふ通るどくをれバ法ふ五の業金を換るるを者ふの
学ようを一日学めくる学ようを及ようをくり

兄弟常不合惡悲を兄弟と爲

兄弟常ふ合不惡悲を兄弟と爲

兄弟ハ者ふ者ふ母の送ようれとる者ハ者ようるの者
学ふ不合ようふ惡悲ようを者ようを者ふ兄弟ようを

○論語彰善篇ふ君子篤而學者ハ人義而有礼四海の内
皆兄弟也と云

財物永く存ぜず不才智を財物と爲

財物永不存才智爲財物

宝ようぶりくをくをくをいつの者とるを失ひ費るをくをくを
の宝ハいつまでもようせるるをくり

四大日々ふ
義
心神夜々暗

勤覺

四大日々疲人神夜々暗

四大とは仏説にいふ地大水大火大風大人の身体をなすもの時に変動

火風の四つの物かりそめに発する時に変動

物の処よりべきものと書経に説きたる人神と魂と

いつるなり四つの物をかりそめにする物なれば一年一年に変

ようとうに変ずるなり

幼き時勤覺
せ不ハ
老て後恨を
悔と雖

幼時不勤学
老後追悔尚学不益

甲斐なし○司馬温公の勤学の歌に後悔せ

夜學

商所益有る
ことなし

故書を讀て
後ことなれ
学文ふ怠る
時勿也

老の来らるを後悔て後
悔するなれとなり

幼讀書勿後
悔

学文勿怠時

するなれ○小学曰朝に暮に学問せ
つるなり

眠を除て通
夜ふ誦せよ
飢を忍て終
日あ〜へ

除眠通夜誦忍飢終日習

眠るべきなれとも夜の眠を除き
夜を徹して学問せよ

雖令師不学徒如向市人

師ハ會と雖學不バ徒市人ハ向ガ如シ

習讀と雖復不バ只隣の戟を計ル如シ

市人

君子ハ智者を愛シ

為學不復只如計隣戟

君子必智者

小人愛福人

君子ハ心智者を愛シ小人ハ福人を愛ス

君子ハ刑をありひ小人ハ惠をありふ

雖入富貴家

富貴の家ハ入と雖貧賤人の烏ハ者

猶如霜下花

猶霜下の花の如シ

為學猶如霜下花

為學ハ猶霜下の花の如シ

貧賤の門を出と雖

雖出貧賤門

為人必如泥中蓮

為人ハ必泥中の蓮の如シ

有る人乃為ハ
死も泥中乃
蓮の如し

父母ハ天地の如く
師君ハ日月の如し

親族ハ警ば
葉の如し

夫妻ハ猶
の如し

○蓮ハ花の中の殊勝なるものなり
ふ聞重叙さぐも花を
ものなり

## 父母ハ天地

父母の我らを
ものなり天地の
恩徳を報ずる
ものなり

## 師君ハ日月

昔ふ孔ハ天と仰ふ孔子父母ハ地と仰ふ孔子父母ハ
天道母ハ地道師君ハ日月のごとく師君ハ
中なるひかりあるゆゑ日月の
万物を養ふがごとし

## 親族ハ警ば葉

親族ハ警のむらく
葉きたるごとく夫妻ハ父母師匠
君ふ仕ふるごとしはるゆふ紙ゆゑ
○本言ハ孔子の祝儀の祝と落葉の祝といふ儀の

## 夫妻ハ猶ほ尾

中山諸王の名ふ
そのもろもろかりのうりとあり

## 父母孝ふ

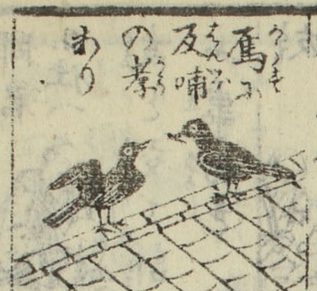
父母ふ孝せよ
父母ふ仕ふまつるをいふ
父母ふ孝せよ
父母ふ孝せよ
父母ふ孝せよ
父母ふ孝せよ

## 師君仕ふ夜

師君ふ仕ふまつるをいふ
師君ふ仕ふまつるをいふ
師君ふ仕ふまつるをいふ
師君ふ仕ふまつるをいふ

## 父母ふ朝夕

父母ふ朝夕ふ孝せよ
師君ふハ晝夜ふ仕ふまつる



鳥ふ反哺の孝あり

## 朋友ふ信ず

師君ニ仕ヘ

晏平仲善人と称せらるゝ人なりて是を敬すとの事なり
禮子の漢人史久分数表久ゝ敬敬を尽すといへり

友と交て誠ふ事勿れ

# 己兄長禮敬己弟愛顧

我より兄なる人に対して敬い奉るべし
顧を尽しめんとも○字彙に愛は慈念こと

友ざち

己より兄あれば禮敬を盡し
己より弟あれば愛顧を致せ

礼敬

とゝろ友達すも兄弟なり弟敬ありといへり長幼
のまるの二つれあるもなり

# 人而無智者不長於木石

木石と無智のものゝ人として智恵なくして長ずることなし
○尚樂天ゝ木石の情はありとしるべし

誰か八苦の海を渡らん

信心

死する時のくるしみ別離苦つらき時のくるしみ怨憎苦
苦らしきくるしみ七つ数ふる若年ふといふるなり八苦
生苦さ四の苦のつまるところは生死の苦なり
は八苦のあとのくるしみ苦ゝの苦ゝいくるの苦ゝ

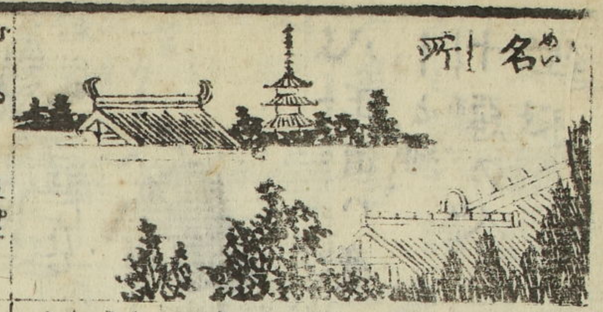
# 八正道強度十惡不往

八正八一は正見正思正語正業正命正精進正念正定
せめるは正業戒定慧のことなり八正邪命を
精を戒定慧を一すとふ八正七ふ八正八ふ
苦難ゝく拙ふつらくけ八ゝを八正
八正道ハ廣ゝと雖

十惡の人ハ往不

殺生偷盜邪淫妄語両舌悪口綺語貪欲瞋恚邪見

名所



無爲の都を樂むと雖
放逸の輩ハ

いつくをいふ古ハ孟子ハ人をもつて七十餘代にのこるまでをいふハ人食欲むさぼりふかきゆへ九十歳の壽後なきなる十ハ若齡一きの和くさう〜回るをくりうへ〜いふハ四ハ人安穩のためれども十歳の人ハ稀なり〜とあり

# 無爲都樂放逸輩不花

まるとの桃源郷の境槃といふく一切祥ひ不ふくのそなへ〜〜〜〜凡俗よ仙せる人安樂の境界その五百の松をもつて孔子遊ことそころのまゝ〜ふ四まひて老をつるものハ花をもいとあり

# 敬老如父母

# 愛幼如子弟

敬老とハ孟子曰ふ老を老とし〜〜〜〜〜人の老を及ぼす〜〜〜〜〜

他人亦我を敬ふ

己人の親を敬へば人亦己が親を敬ふ

欲達己身者先令達他人

我身を立んと思ハヽ人を敬ふべし論語に曰己を立んと欲して人を立し己達せんと欲して人を達すと云

見他人之慈即自共可悲

人の慈を見て心の毒なるものひとしもふうすをの情をいくべし○論語に曰是日哭して歌うことなかれと云

聞他人之苦則自共可脱

人のくるしびをきけハともに脱びいたるべし○論語に曰人と歌て哭しハ必ず是を変せしめて而后これを和すと云

人而無智者ハ木石於異ならず

人と而智無者ハ木石於異ならず

人而無孝者ハ畜生於異ならず

人と而孝無者ハ畜生於異ならず

人の教ハ孝を本とす而して孝の道ハ人倫の基なり故に孝経に曰身体髮膚之を父母に受て敢て毀傷せざるハ孝の始なり又曰人の生るハ孝を本とす又曰孝ハ百行の源なり又曰孝ハ天の経地の義なり人の行ハ孝を本とす孝の道ハ人倫の基なり故に孝経に曰身体髮膚之を父母に受て敢て毀傷せざるハ孝の始なり

不交学友者ハ七学林

犬

三學の友ふ交ら不い何ぞ七學の林ふ遊ん

學者

不学但笑紅雀波八苦海

四等の船ふ也但笑とふハ苦ハ一ふ学ぶとして仏の法名二ふ信ずとして仏の法身但ふ法ずとして仏法ひとき身ずとして仏の法身但ふ法ずとして仏法ひとき年寿の若ーとふ病苦やむとしてのくるーを但ふ死苦

即ち自ら共ふ患ふべー

他人之喜びを聞てハ則ち自ら共ふ悦ぶ可ー

見善者速行見惡者忽避

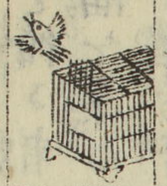
人のうれをえてハあく事ひとまーを行ひとまーとそれハそのうきを去てとよさみーとうー論語ふ曰ふ人行ひつゝ射ハ心ん我師あり善ふ学ぶものハ何もあれを学む

善を見て者速ふ行ひ

修善者福祐惡者禍殃

惡を見て者忽ち避よ

善根



好惡者招禍　宛如影響

善を脩る者は福を業る
響に響の音に應ずるが如く
惡を好者は禍ひを招く
宛も身に影の隨ふが如し

惟富勿忘貧 貴勿忘賤

あくを好むものは禍を招くなり〇釈家罪業経に云ていはく
惟富勿忘貧 貴勿忘賤 惟家畢罪経に云ていはく

或貴而後賤 或先貴後賤

おなじく富貴なりしかたくらべ〇富貴なりしかたくらべ
或貴而後賤 或先貴後賤

富と雖貧を忘る事勿れ
貴と雖賤を忘る事勿れ

富と雖も貧を忘るる事なかれ〇貴と雖も賤を忘るる事なかれ
富と雖貧を忘るる事勿れ 貴と雖賤を忘るる事勿れ

或は始は富て終は貧く
或は先は貴て後は賤し

富貴の浮沈の像は小説に太敏之味線を
すくてうたふる義に習て義理を安しとす
或始富而終貧 或先貴後賤

夫習ひ難く忘れ易きは音聲の浮沈

夫習ひ難く忘れ易きは音聲の浮沈

又學ひ易く忘れ難きは書筆之博藝

又學易忘者書筆之博藝

嫌ひ難きは古来の書法〇浅しとも深しとも
博藝とそしるみな此の意なるべし

但有食法亦有命

食は法にあり口をまつのみにあらず
すべからく此命の命にあるべきなり

物不忘農業必美慶子孫

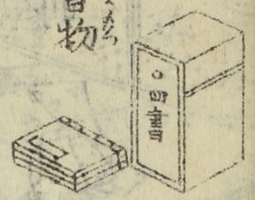
但し食有れば法有り身有れば命有り

# 故末代学者先祖業を忘言

猶農業を怠る不必ず学文を廢ること莫れ

故に末代の学者先此書を案ずべし

# 学問之始身終まで忘失すること勿れ




書物

是学問之始身終まで忘失すること勿れ

学問

# 實語教

童子教增注繪鈔

# 童子教增注繪鈔

童子教ハ京白楽天成都の文殊堂にて作られし書にて名くる所なり夫唐土の人にて大師の弟子なり安祐和尚の作にして一巻の書なり又童子教と名けられしなり

一説に童子教と名くるこれ愛敬に童ハ稚しいとけなき名なり

夫貴人の前居て露不沾立

秋なりとて人の前に居てハ露を得不

道路に遇てハ跪て過よ

召事有バ敬つて承いを

両の手を胸に當て向へ

夫貴人の前に居てハ露を得不沾立

道路に遇てハ跪て過よ

召事有バ敬つて承いを

両の手を胸に當て向へ

慎んで左右を顧ることなかれ

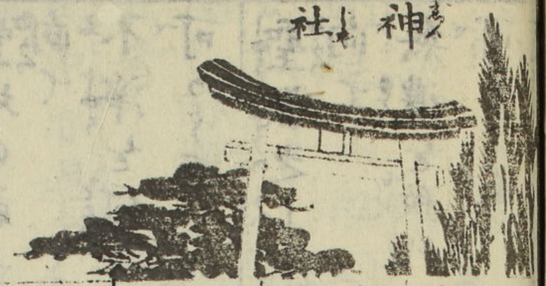
問はざるを否へ

不問者不苦有作者謹聞

仰せ有ば謹て聞

三寶を敬ふ三禮神明を敬奉る

三寶とは三禮を書し神明とは再拜を致す



神社

人間成一禮師君可戴

人間ふは一禮を成せ師君をば頂戴す可し

墓を過る時は必ず慎め
社を過る時則ち下よ

墓時必慎 社時必下

墓は亡者の所なり人の中に敬ひ慎むべし社は神を祭る所なれば謹み敬ふべし

堂塔の前に向て不浄を行ふ可からず不

向堂塔而不可行不浄

仏殿宝塔の前にて大小便の浄を行ふは仏像をけがすなり

聖教之上に向て無礼を致す可からず不

向聖教之上不可致無礼

聖教の上に向て書を読み論を講ずるは礼なり

人倫に礼あり朝廷に法あり

人倫有礼朝廷有法

人倫とは人を以て人とす礼なくして禽獣に同じ

人と而て礼無き者

人而無礼者

人として礼なき時は禽獣に同じ

喪中に過ち有り

喪中有過

喪に服する時は慎むべし

喪に交りて雑言せざれ

喪交不雑言

人の喪に会して無益の雑言をいふべからず

事畢らば速に退よ

事畢者速退

長居すべからず

事に觸て明に違わず言語離るゝを得不也

## 違明言信不得離

何事まそる人に物せ〜ことを遠ふかしんに成おせ〜ことを
多れ是〜ことあり○倫語に曾子仲尼と楽りて久しく敬ことの
語多き者は品少し

## 語多者品少

老たる狗の友を吠ぐ如し

犬

## 老狗友吠

ゆつく話ゆへ人の言ことをよく聞もし君子たる人は自の
行をさして後人の言を聞ものなり又小人は
其身を乃ちふかくして後人の言を聞ものなり
論語に子曰君子は言を遠て行を近くす
物の利ある也〜ざる也〜不也〜れ〜とへり
論語に子曰君子は能くけいこしの物を
ふかくして後人の言を聞ものなり
論語に子曰君子は言を遠て行を近くす
論語に曾子仲尼と楽りて久しく敬ことの
論語に子曰君子は能くけいこしの物を
ふかくして後人の言を聞ものなり



解怠の者は食を急ぐ

○解怠者は人を吠ハかまはす死斗を倫の利ある也〜ざる也〜
○解怠者は人を吠ハかまはす死斗を倫の利ある也〜ざる也〜

## 解怠者急食

疲たる猿の菓を貪ること如し

猿

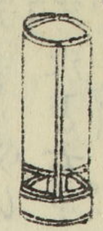
## 疲猿貪菓

勇者は必ず死を有て夏の虫の火に入ること如し

## 勇者必有死夏虫如入火

物の利ある也〜ざる也〜出曜經に云猿猴の
仁義を失せざるを知〜物〜○出曜經に云猿猴の
菓を取て食ることを忘れ死に至る猿の菓食
勇に仁義の勇と奥義の勇とを二の
のうち仁義の勇とは仁義を
なすことを云又奥義の勇とは仁義を
なす只法を教命を順ひて身を捨ることを好むを云

夏の虫



の雪をさして色千色血染まる者の必ず老きこゆる孤の雪老たれば山谷が行ふ飛蛾焰に赴く死禍を其身といふべしけんく

紙者又色迷

春者鳥迷林

紙者は又過ち無し

春の鳥の林ふ遊ぶが如し

人耳者牆壁密而勿傳言

人の耳者壁ふ附く密而も讒言もるること勿れ

人眼者天隱而勿犯用

人の眼者天ふ懸る隱而も犯し用ふること勿れ





車以三寸牆遊千里路

車は三寸の轄を以て千里の路を遊行ス

人以三寸舌破五尺身

人は三寸の舌を以て五尺の身を破損ス

人の眼者天然として人おとをいふべからず徒て耳にのりとしるべし侍御小弁篇に君子無易由言耳属于垣云〻

車は三寸の轄をいふ〻〻〻

耳あり

口は是禍之門

舌は是禍ひの之根

口を使鼻の如くあり使者身終すて敢て事無し

使の字二度かつりむべし

口舌禍之門　舌是禍根

口舌ようりうぞうひをせまるゆへにうくたりふむべしすりかうくの意なるゆへにうりまるゆへ是を家の門にうたれとて禍の門といふ

使口如鼻　終身敢無事

鼻はめのいまあゆへ口をもちざるくみて居ふべし生ぞうひはあるくまりうりの義菩薩のいろく口の虎身と害し舌の剣命を絶つ口をして鼻のごとくあるくめば死を法結ふと

曰言一出者　駟不追舌

曰言ふ人ふのいひはのまりうくもちをとれとへ

過言一さび出せ者駟も追も舌を及さ不

駟追不及舌

犯るまて遊くも千を馳をするゆあるべしとあり犯るる元軽一年をるは足まそひくまるをいりまり古今数舎まよりまり覚悟ご徳倍をりてるく犯り舌く及ばんとあり掛するふ舌と遊さばくはの文字はのやまれる孔返の字を及の字に書てえるべしといふ

天は眼あり

白圭玷て磨　惡言玉難磨

白圭の玷は磨く可し惡言の玉は磨き難し

白圭玷て磨　惡言玉難磨

白圭はきくまるへ磨ぬるいきくまるは元のかくはくふまるまれて人の義あ悪ふまるといひきくまるいの極は磨ぬ磨ひ元のまるふ磨くしくと

禍福者門　惟人自招

禍も福もつまりの邪ようりまるわるくまるは人の招招と身の行也ふるようりまるは馬子馬ゲ吉の俗をいふ

禍福門に無し唯人の招く所に在り

天の作る災ひは避け可し自作る災ひは逃れ難し

書経大甲篇に天の作せる孽は違べし自作せる孽は宣べからず天の災ひは免れ難し

夫積善之家必有餘慶矣

易経文言曰積善の家必ず餘の慶あり

又好惡之所必有餘殃矣

惡を好むを殃と云ふ



積善の家

又好惡之所必有餘殃有り矣

人而陰德有れば必ず陽報有り矣

人而陰德有れば必ず照名矣

人として陰徳あれば必ず照名あり

人而有陰德有れば必有陽報矣

陰徳ある人もれば陽報あるを布げば因ふえんえんとして孫も絶えざるもたぐまれなり



信力堅固門 吳猶雲公記

必ず照名有
り矣

信力堅固の門ハ
災禍の雲起
ること無し

念力強盛の家ハ
福祐の月光
を増し給へ

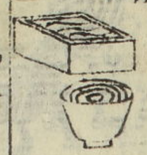
心不同ハ面の如し

念力強盛家福祐月増光

心不同面如水隨器

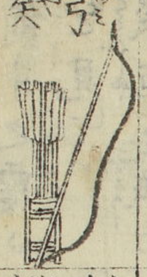
心の不同ハ
るハ面の如し

壁ハ水の器
ハ隨ふ如し



水ハ器
ハ隨ふ

他人の弓を
挽不
他人の馬ハ
騎不




不挽他人弓不騎他人馬

壁ハ他人の壁を穿て我物の如し
我物の隙ハ
鈔のごとくなるべし○明心寶鑑云

七ツ八ツ他の子ハ
挽ものを他の弓ハ騎ものを他の馬

車家を居の元手あと河ハ倫
車の家をこしやと後ハ
車家を居の元手あと河ハ倫

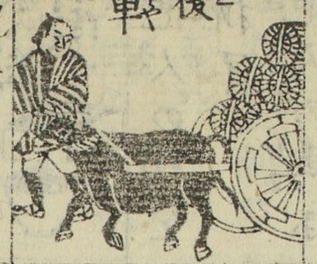
車家之居元手河倫

車の家をこしやと後ハ
車家を居の元手あと河ハ倫

車家之居後車之為誡

車家ハ皇朝類苑巫医出言敬ふ子代の
車ハ戒と云ふ白居ハ唐のせるふ云言敬ふ又漢出の賈縄さくるハ

前車之覆るを見ていまの後車之誡めと爲す



後車

前車之忘れざるを後車之師と爲す

前車之覆不忘後車之師

呂氏春秋に曰く殷の紂王の時に崇侯虎あり西伯昌を羑里に囚へて之を殺さんとす其臣閎夭散宜生等美女奇物を求めて之を紂に獻ず紂大に喜び西伯を赦して之を遇す西伯乃洛水の西の地方千里を紂に獻じて以て炮烙の刑を除かんことを請ふ紂之を許す

呂氏春秋に曰く殷の紂王の時に崇侯虎あり西伯昌を羑里に囚へて之を殺さんとす其臣閎夭散宜生等美女奇物を求めて之を紂に獻ず紂大に喜び西伯を赦して之を遇す西伯乃洛水の西の地方千里を紂に獻じて以て炮烙の刑を除かんことを請ふ紂之を許す

○羅紗極而禍多

羅紗極而禍多

倩の孔子廟の門の東の方の柱の内の方を見るに孔子の畫像あり其の傍に子路の畫像あり其の子路の畫像の上に羅紗を掛けたり此の羅紗の掛けたるは孔子の畫像を隠せり

羅紗は紀元前一千年頃の埃及の王の時に初めて織られたりと傳へられたり其後埃及の王の時に羅紗を織りたりと傳へられたり

武帝に仕へたる周の遊俠の者に郭解といふ者あり

郭解は漢の武帝の時の人にして濮陽の人なり

郭解は大に俠を好みて人を殺すこと多し

郭解は大に俠を好みて人を殺すこと多し

極盛

善立而名流

羅紗極而禍多

ひ多し

讀書

# 人死而留名虎死而留皮

人ハ死して名ハ残るもの也

二月十八日仏紙王紙女母の刀自大往生をこげていとゆるしをきとめ

人ハ死して名ハ残るもの也

いつ[illegible]虎ハ山の獣の長[illegible]猫のこと大成る牛のこと[illegible]

虎ハ獣の小さく千歳を経ても[illegible]

人くさハ虎死しても皮のこと[illegible]

人ハ死而名を留め

虎ハ死而皮を留む

# 治国土賢王勿侮鰥寡矣

虎

國土を治る賢王ハ鰥寡を侮ること勿也 矣

賢王

[illegible]

[illegible]十二歳で夫なきを女やもめを寡といふ大戴禮に載せり○孝経云

国を治る者ハ敬て鰥寡を侮ら[illegible]

鰥寡の人ハ人の[illegible]

[illegible]士農工商ハ礼義を以てすべしとなり王制に鰥寡

のものハ天民の窮[illegible]

# 君子不養人則民飢矣

老ある人

君子人を譽ては不ば則ち民惑を作す矣

上に在る者は貴賤を正くすべし若し卑らの輩を侮り民怨を招く者あらば

入境而問禁　入國而問國　入郷而問俗　入門而問諱

境に入て禁を問ひ國に入て俗を問ひ郷に入て諱を問ふ

入境而問禁　入國而問國　入郷而問俗　入門而問諱　為敬主人也

郷に入て諱を問ふは門に入て諱を問ふ人のつとめなり先輩の諱を問ふ事一しきりの儀なり禁忌なる諱とのふるなり

俗に入て俗に隨ひ門に入て諱を問ふは主人を敬ふ為也

若不知私諱　至二尊号也

私の諱とは我名を諱ん人とも我名を問ふ者をつけ名なる例く是名は二つとなれる故号とは敬ふこと

君所に入ては私の諱無し　無二尊号也

愚者事君必可有近憂

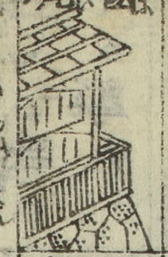
愚者は事君に近憂を有べし

愚者は事君に近憂を有べし

愚者は事君に近憂を有べし

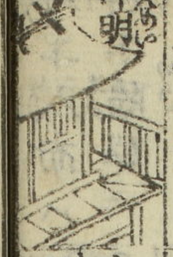
愚者ハ遠慮無シ
必ず近き憂有り

# 如用笠漏天 備針指地




笠の如くに天を覆ふ天が笠の如くに天を覆ふ針を用て地を指す如くに地を指す又小さく〜ハ

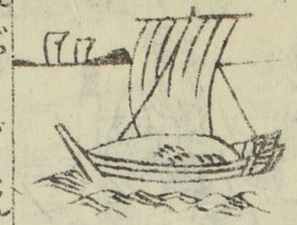
莊子曰笠を用ひて天を窺ふ如し針を用て地を指ふ似り




# 神明罰人 非敬而合憑

神明と云ハ天地を神を主る諸侯の神を云ふ非敬而合憑

あ〜ハ其の敬を敬まて他の人を憑むハ全害なんとなり〜ハ其の害なんとなり




# 根性愚鈍 好自学位

根性ハ愚鈍なりと雖ども自ら学ぶ位ふ致

定慧の業を習ふ

根性ハ愚鈍なりと雖ども自ら学ぶ位ふ致

学の字ハ覺の字と家鞆の字と合せたる字なり

天竺に佛法を学ぶ位と云ふ

# 一日学一字 二百六十字

一日に一字づつ学ぶ一年に二百六十字ハ唐土ふてん支那ふ朝鮮ふ和国の三国を一年の日数と定むる

一日ふ字を学べハ

ふうりて二百六十字ハ成る我朝にて我国ふ唐土ふ朝鮮ふ和国の三国を一年の日数とする也二百六十五日あり

三百六十字

一字千金ハ
富る
一点多生を
助く

呂不韋

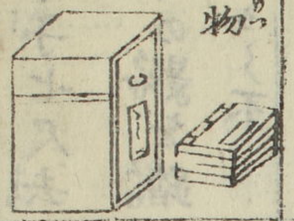
# 一字千金一点助多生

一字の價を五百せんにあの金ハ
呂不韋とゆふ人呂氏春秋といふ書をつくりて咸陽とゆふ市の
門ニつるす事ハとゆふ金のかをうけおいて此ハ一字を一ツとも
加へすりとるすハ千ハ金を与へ一ツとも取るハ
みなり呂氏春秋のこハ人ゆふ伝りて天下の宝とすれり又
漢書韋賢ゆふ伝ハ黄金千斤を教ハ子ハ一経を教ハ子と
と、さうゆふ点ハ一生を助ケ多生の
ゆとなるこ法花経ゆふ法花経の中ニ多生の点を
うちハ又仏の水をとゝ一偈の言葉なりとも地獄をまぬれ
てんるゆふる地獄ハ点多生をたまくるゆへ

一日の師を
も疎ハ不
況数年の師
乎や

一日ハ一日の師ハ三世の
契
祖者一世の
昵を

書物



# 一日ハ不疎 況数年師乎

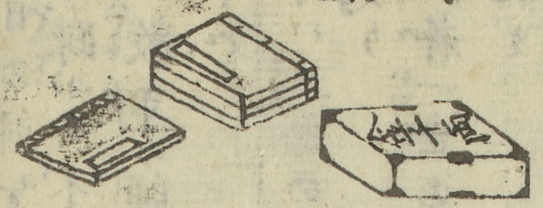
一日ハ一日の師ハ三世の契 祖者一世昵

一日ハ一日の師ハ三世の契とゆふ祖ハ一世のむつまじゆふ
生家の人ハ師の恩父母の恩ハ
師の恩ハ父母ハ現世一生の分を
ハ現世未来の三世の
命を中ハ

弟子七尺去て師の影を踏可うゝ不

# 師新不可踏

師匠の新を我是を論べ
ゝ七人弟子九ありて孔子
長沙會稽及び戸迦羅越
師いく世の契約い一世の眠といふい雑氏のく世流轉の境ゝれハ
嘆くおいて弟子等世教ふゝうて孝べ孔子弟子に教ふ
にほうを以て文行忠信師ゝる孝く父母恩を養育せゝれハ
おとゝ孝ゝ以ゝ師匠の教ふのゝゝれハ人ゝる孝を知るゝ
主君の恩ひせのゝゝれハ父祖の業を受ゝ孝ゝ
と主君の恩ハ何もゝ等ゝく身命ゝ仕ふまつるべきのゝ
楽苦すゝ事の境といふも成るをいつゝ法僧ゝ
七尺者ゝ弟子ふの仏ふ去師を敬ふ者ゝ又ゝ孔子を
ふ師匠と以ゝ雑義を八ゝ孔子も仁ふ当ゝ師ふ






觀音ハ師教の為ふ寶冠ふ弥陀を戴く

觀音の像

# 観音為師教宝冠戴弥陀

観音ハ師の弥陀ふ冠の
問ふいゝ者ふハ師匠ふ
ゝ又大日如来ふ
天冠の化仏ゝ

孝至ハ親孝の為ふ頂ふハ父母の骨を戴ハ

# 孝至親孝頂戴父母骨

すゝ孝ゝ宝冠とハ宝の冠ゝ
をのちて天冠ゝ西ハふ彩ふり

寶瓶ハ白骨を納む

勢至の像

## 宝瓶納白骨

宝の壺と〇偽あり上の文は冊子の骨を裁ぬ故に文字ハ宝瓶ハ白骨を納とハいふ〻浅の人の注解の宜敷るべし

こゝ[illegible]実情者子の二教ハ[illegible]の[illegible]えらびさく孝者を深くありひのかを

## 朝早起洗手

朝ハ早起て手を洗ひ意を攝て経巻を補ひ

## 拂忘補経巻

拂ハ[illegible]

## 夕遅寢酒色

夕ハ遅寢て足を洗ひ性を静て義理を案ぜ

## 辨性案義理

拂ハ洗足して[illegible]性を[illegible]て学問の[illegible]

習ひ讀とも意ハ入ハ不ハ酔寢て調を語るが如し

## 習讀不入意如破寐徊語

[illegible]

千巻を讀ども復せ不ハ財無して町ハ臨が如し

## 讀千巻不復之財如除町

[illegible]

薄衣之冬の夜も寒を忍で通夜ふ誦せよ

食之夏の日も飢を除て終日に習へ

酒ふ酔ハ心狂亂し食過ハ學ふ倦む

身を温すれバ眠増身を安すれバ懈怠を起

医衡ハ夜學の烏ふ壁を鑿て月の光を招く

孫敬ハ學文の爲ニ戶を閉て人を通さず

蘇秦ハ學文の爲ニ錐を股ニ刺て眠らず

孫敬學文閉戶不通人

蘇秦學文錐刺股不眠

俊敬ハ学文の爲ニ縄を頭ニ懸て眠らず

車胤ハ夜学を好んで螢を聚て燈と爲[矣]

俊敬學文縄懸頭不眠

車胤好学螢聚燈火

休穆

宣士ハ夜學を好んで雪を積て光と爲矣

宣士好學積雪爲燈矣

休穆ハ意ヲ文を入て冠之落るを知ら不

休穆入意文不知冠之落

高鳳ハ意ヲ學文のあらつて文を入て変の流を知ら不

高鳳入意文不知変之流

高鳳

劉寔ハ衣を織り乍ら口ふ書を誦して息ま不

劉寔織衣口誦書不息

倪寛ハ耕作
しながら
腰ふ文を帯
して捨てず

此等の人者
皆
晝夜學文を
好んで

文藻國家に
満つ
遂に碩學の
位ふ致ふ

倪寛耕作腰帯文不捨

此等人者皆晝夜好學文

文藻滿家遂致碩學位

倪寛ハ孔安国ニ従ヒ学問を勤む学中ニ入て耕作ス
ルトモ腰ニ文を帯シテ捨ルコトナシ此等の人者皆
昼夜学文を好ム文藻家ニ満チ遂ニ碩学の位ニ致ル

織ひ簦を磬
筒を振とも
口ふハ恒ふ經
論を誦せよ

席と作す牛を負て学ハ学の徒のたひするなり梅学
ハ頃ハ大の義ニ大学ニ入れりとなり

織簦磬筒口恒誦經論

孫康ハ双六ものめりもつぱらハ学ニ入ルコトなり
漢の許升ハ徒ハ学を好んで世の名聞とする事なり

又弓を削て
矢を知とも
腰ふハ常に
文書を掛め

張議新古を
誦せバ
枯木葉を
結ふ矣

又弓矢腰ニ掛文書

張議誦新古枯木結葉矣

又弓矢ヲ腰ニ掛ルトモ常ニ文書ヲ掛メ張議ハ新古
ヲ誦セバ枯木ニ葉ヲ結ブ矣

亀蒙史記を誦せば古骨膏づくとを得り矣

伯英ハ九歳にして初めて早く博士の位に到る

宗吏七十にして初めて學を好んで師傳に登る

智者ハ下劣家吏ハ元百姓なれども業をなすことせざる第七十にして初めて学問をなすこと雖

高臺之閣に登る

愚者ハ高位なりと雖

奈梨之底に墮つ

智者の作る罪者

大不孝地獄に墮不

愚者の作る罪者
小なれども必地獄に墮

愚者低羅者小心法地獄

愚者ハ常に憂ひを懷く
譬ハ獄中の囚れの如し

愚者憂懷譬如獄中囚

智者ハ常に歡樂ひ
猶光音天の如し

智者歡樂猶如光音天

父の恩ハ山も高し
須彌山尚下し

父恩高於山須彌山尚下

母の德ハ海も深し
滄溟の海還て淺し

母德深於海滄溟海還淺

白骨者父の滓
赤肉者母の滓

白骨者父滓赤肉者母滓

赤白二諦和
して五體身分と
成る

胎内に所を
ふと十月
身心恒に苦
勞に

胎外に生れ
て數年
父母の養育
を蒙り

赤白二諦和成五體身分

胎内十月身心恒苦勞

生胎外數年蒙父母養育

父の白紅骨は父の激精にて肉は母の激精なり
いんせいはたんせいのるゆえなり

赤白二諦和とは男女の精血合して人となる又胎内にて五體身分成就する
肉血まだ軟なる者は母胎内にて生じ筋骨堅なる者は父精にて生じ

胎内に苦しむ十月の間おのれ一身もまたもやまさる
苦しみはいかばかりぞや人の子たるものは恩を思へ

胎外に生れ數年父母の養育を蒙り



晝者父の膝
に居て
摩頂を蒙る
こと多年

夜る者母の
懷ふ臥て
乳味を費し
たること數斛

朝父子山野
干交て
歸路を殺して
妻子を養ふ

晝者居父膝蒙摩頂多年

胎外に生れ出て父母に養はれ成長して父の膝の上に居て摩頂を蒙ること多年

夜者懷母費乳味數斛

夜は母の懷に臥て乳味を費すこと數年久しかるべし

朝父子山野殺歸路養妻子

朝は父子山野に出て干交を殺して歸路を養ふ
殺は母の懷に臥て乳汁をのむこと凡一百二十斛
の乳を呑とのり恩重し孝子の斛は斗の白乳を除くなり

暮れは江海の辺に出て妻子を養ひ衣食を求むるなり
于臨人て
鱗を漁りて
身命を資け

養除于江海漁鱗資身命

且暮の命を資ん為ふ
日夜悪業を
造る

為資身命日夜造悪業

朝夕の味ひ
嗜む為に
多劫地獄ふ
陳つ

為嗜朝夕味亦知億劫獄

恩を戴て恩
を知らず
樹の枝
を折が如し

戴恩不顧如樹折枝

徳を蒙て徳
を思ハず
野の鹿の草
を損ずが如し

蒙徳不思如野鹿損草

酉夢其父を
打つ
天雷其身を
裂く

酉夢打父天雷裂身

班婦其母を罵つて霊蛇其命を吸ふ

郭巨其母を養ふ爲に穴を堀て金の釜を得る

姜詩自婦を去て水を汲ハ庭ハ泉を得

孟宗竹中に哭いて深雪の中に筍を抜く



帝の隨ふ不孝の人と成時其父を打擲せしが天俄かに雷公不孝を責つくまろ

# 班婦罵其母　霊蛇吸其命

班婦字は才知達山人有り老母にむつひいろりの〻しるを見れば忽ちに蛇出て班婦をのむ

# 郭巨養母　堀穴得金釜

郭巨ハ後漢の世の人也孝を尽せり子今こ兼まりは老母家人食をうばひ奪ふ巨子を埋んと穴を堀

# 姜詩自婦　汲水得泉

姜詩ハ母に孝行也ハ朝夕ハ自ら手を洗ひ食を進ず妻乃の祇七八里六丁里を隔てる江流の水を毎日汲ゝ或日忽

ち泉出て田湧しられば姜詩大よ喜り妻を

# 孟宗哭竹中　深雪中拔筍

ごく失敗ることを忽ち泉の湧ふ甘泉湧出て味く用ふ

王祥歎ひて氷を叩けば堅凍の上に魚踊る

# 王祥歎叩氷堅凍上踊魚

孟宗が母の筍を所望そこのくれもの林に入て天に祈るやがて雪の中より竹の子出いでこれを

王祥が継母の事一柴しの事にあやまつことの有もあれども

孝子の行ひ一しきりの成時寒中に魚を捕とくれて

不思議にも王祥衣服をぬぎて氷の上に伏ゐ

鯉二枚もとり出さんとす今ふ世川の氷へ王祥が

孝子盲父を養ひ涕泣して両眼を開く

# 孝子養盲父涕泣開両眼

孝子盲父の事ハ昔唐の時の人なり名を郭巨と号す

家貧しかりしかば母を養ひ

食を噛ば齢ひ若く成る

刑渠ハ老母を養ひて

食を噛ば齢成若

# 刑渠養老母嚙食齢成若

刑渠ハ唐の人なり初め父を亡ひ孝子の母を孝養し

一身を責て孝親の御器に備ふ

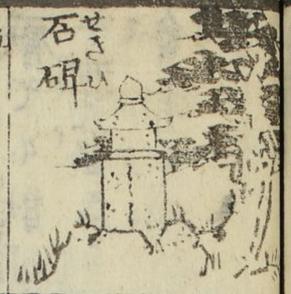
# 董永賣一身備孝親御器

董永ハ漢の人なり父を亡ひ孝子の母を孝養し

楊威獨の母を念ひて虎の前に啼いつば害を免

顔烏墓の土を負いて烏来りて運び埋む

許孜自ら墓を作り松柏を植て墓と作る




此等の人者皆父母に孝養を致す

佛神憐愍垂て所願悉く成就

楊威念獨母　虎前啼免害

楊威は年若き時父を亡ひて一人の母をいとおしんでそだてたり

顔烏墓負土烏運埋

烏の親烏は烏鳥の孝の人なり親の墓を築き時烏多く土をふくみ来りて労を助けしなり

許孜自作墓　松柏植作墓

許孜は孝行の人なり親死して墓を作り松柏を植て墓とす

孝行を求て木生あげしなり松柏は冬かやをいとふく世なれば許孜のこのやまうつべし

此等の人者父母致孝養

此等の人々は父母に孝養をいたせし人なり

佛神憐愍垂願悉成就

佛神憐愍垂願悉成就

此等の人々は上の郭巨より許孜までの十人をいふなり世人孝行をほこせば佛神憐愍垂願悉成就

生死の命は無常なり早く涅槃を傾ふ可し

煩悩の身は不浄なり速に菩提を求む可し

厭ても厭可ハ娑婆なり會者定離の苦しみ

生死命常

早可傾涅槃

煩悩身不浄

速可求菩提

厭可厭娑婆

會者定離苦

恐ても恐可ハ六道なり生者必滅の悲しみ

壽命は蜉蝣の如し朝に生て夕に死し矣

身體は芭蕉の如し風に隨て壞を易し矣

恐可恐六道

生者必滅悲

壽命如蜉蝣

朝生夕死矣

身體如芭蕉

隨風易壞矣

綾羅錦繡者
全く冥途の
財にして非ず

黄金珠玉者
只一世の財
寶

榮花榮耀者
更に佛道の
資けに非ず

綾羅錦繡者　全く冥途の財にして非ず

黄金珠玉者　只一世の財寶

榮花榮耀者　更に佛道の資けに非ず

官位祿職者
唯現世の名
聞

龜鶴の契を
致し
露命の消不
祥

官位祿職者　唯現世名聞

龜鶴契露命不消祥

鷲鷲の会を重ねしも身體の壞を不問

重鷲塔と会衆不懷同

忉利摩尼の殿

遷化の無常と歎く

忉利摩尼殿歎遷化無常

大梵高臺の閣

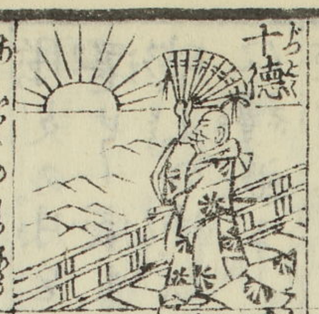
火血刀の苦を悲しを

大梵高臺閣悲火血刀苦

須達の十德

無常を留る

須達十德無留於無常



十德

阿育の七寶

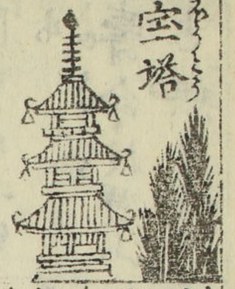
壽命を買ハも

阿育七寶買於壽命

須達ハ摩竭国の大臣ニて十德を備ること有れども死を免れ難し死を留めて十德を施して徳を死せざるべし十德とハ一ニ身性柔和ニ二ニ信心堅固ニ三ニ大富財寶ニ四ニ種族いせのニ五ニ智慧聡明ニ六ニ年齢七十ニあまる七ニ行淨行ひ清くハ八ニ礼儀礼義ハ九ニ上歌上ニ歌ハ十ニ容貌を見ること無し

大梵天ハ色界十八天の一部にして梵天王の住ス所ニ梵衆ハ梵天王の眷屬ニ梵輔ハ梵天王の輔佐ニ梵産と合戦の時ハ火血刀の苦ミあるべしと云ふ

空塔



この塔は天皇の西王母七寶を納る宮殿なり神隼宮は玉女宮六女を義宮七女を壽宮

こう金剛紙寶殿八方四面の塔を作り祖の大王を長寿命を買ひとの出来ひして宝塔を死しなり

月支還月威　陵王使被縛

月支とは天竺をいう還月威とは月の桃士を召しむ桃士兄弟四人を各八神色をいう七日こゝに命終るを勝り

梵士

この梵士は彩色を造人と須弥山或は法中に入りて神通に命を絶さんとも七日目に人も命の後の魂ふ

菓実の魂にて義るが如し王はうを使ひ精霊の神神ふ

桃士は人をこの色をうつくしく死をまぬかる

月支還月威　陵王使被縛

月支の月を還せし威も琰王の使ひに縛被る

獄卒

龍帝の龍を投し力も獄卒の杖に打被

殺帝投龍力　獄卒杖被打

るとこゝにんや仏大王まげたるかこの人を殺一生中法の中まあるてまを殺さるまを殺さるまを

殺さるまを殺さるまを殺さるまを殺さるまを殺さるまを殺さるまを殺さるまを殺さるまを殺さるまを

ゆくとこゝ陵王の使ふ一切衆生命終る時ふを閻魔法王

獄卒を殺人の人の棄鬼二人を棄鬼二人を殺鬼

鬼叫三人を立て殺桃士が日月を自ばさるこゝる

力の威勢かむすして陵王の使の鬼ともみの時ひこゝ

かゝるこゝもて命終こゝる

毒海龍王は徳龍を殺して獄卒の杖にて打被

人布施しを行ふ可し
布施は菩提の粮

人充行布施菩提粮

人最も財を惜まず
財宝は菩提の障ひ

人貪不惜財宝菩提障

若人貧窮の身にて
布施す可き財無き者

若人貧窮身可布施財

他の布施する時を見て
隨喜の心を生ず可し

見他布施時可生隨喜心

心に悲を一人に施せば
功徳大海の如く

一人施一切徳如大海

己が為に諸人に施せば
報を得ること芥子の如し

為己施人得報芥子

砂を聚て塔
為る人
早く黄金の
層へを研く

花を折て佛
に供る輩ハ
速ヶ蓮臺の
跌さを結ぶ

一句信受の
力も
轉輪王の位
に超う

たとへ数劫をわどるとも高山のごとくなれども果敢のこと

**塔婆為塔人　早研芳参層**

塔婆とハ梵語なり卒塔婆ハ唐土にいふ金剛堅固の義なり
なるべし石塔を築て塔婆とする功徳の場ゝ仏身と成こと

**折花供仏輩　速結蓮臺跌**

もを結ぶ如く仏ハ心ゆ蓮華の跌を結ぶ故に跌坐ともいふ仏像の文字ハ足ゝ

**一句信受力　超轉輪王位**

草花

華嚴経曰ク一句一偈未曾有法ハ三千大千世界の
満つ宝ちりひ釈梵護世の位をもつるの縁ゝとなる
伝教ハ伝ハりて受ハ持ちすり玉ハ成仏
ゆ自生ちるの車輪の色ちるとのんまて新いのすり

**羊偈聞法の徳　三千界の寶に勝をう**

學僧

**半偈聞法徳　三千界寶勝**

偈とハ梵語なり唐ゝの翻ゝ文字ゝ字を
と一句上ゝきをうを一偈とのふ半偈ハ
大世界ゝ一ゝの日月ハ天下を照てを光明をてらしかねこれを
一世界とハ日のごとくなる世界の中ゝ千の月日千の須弥山河
界を三千人界とて三千世界とのふ仏ハ阿含経ゝ

上は頭佛道を求須
中は四恩を報ぜ可
下は編く六道に及ぶ
共に佛道を成じ可し

上須求佛乃中可報四恩
下編及六道共成佛乃

四恩は天地国王父母師長の恩なり六道は第六天より下人畜に佛法を施して恩を報謝し奉る也

人は皆佛道に及ぶ

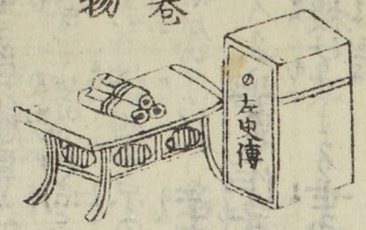
幼童を誘引し為に因果の道理を注し

為幼童誘引因果乃理

国は君恩の報恩は君恩の為に人倫を修し一切の善を勤むべし

内典外典より出づる見聞者誹謗するなと勿を聞者笑ひを生ぜざれ

出内典外典見聞者勿誹謗




元亨釈書巻の四に釈の安然は佛教大師系族なり母美濃らく母に入るとて夢に生ずるなり

及人で聰敏人より秀れ宝山に入るに奥の奥秘隠蔵す

遍照は一切衆生を救ひ摂し百家の学を兼ね

内典は釈氏の内典や儒教の外典より出るなり

の師も孔孟の教へを学んで仏の教へを学ぶべし

とまり人を治るを内教といひ身を治むるを外教といふ

童子教を慈覚大師心義恵墨章郎が成佛子藏和尚元慶八年の弟子安然和尚と云て紹ーて元慶寺の住職なり傳法阿闍梨の号ありと云云

人あり此人西の京の麹屋の子にて愛ばせんとて此書を作著し授け子ーとり世ふ普く行はるるなり

釋氏要覽曰

自七歳十五歳迄童子ト云云

# 童子教注解繪抄 終

野口立泉書


明治十五年春日新刻

書肆

西京 出雲寺文次郎
村上勘兵衛
柳原喜兵衛
大野木市兵衛
松村九兵衛
田中太右衛門
前川善兵衛
中川勘助
坂 梅原亀吉
尾州 片野東四郎
越後 樋口小左衛門
信州 新保屋太吉
横濱 西澤喜太郎
高見甚左衛門
吉川伊兵衛

東京
北畠茂兵衛
稲田佐兵衛
牧野吉兵衛
小林新兵衛
北澤伊八
出雲寺萬次郎
小林新造
山中市兵衛
辻岡文助
梶屋喜兵衛
袋屋亀次郎
浅倉久兵衛
石川治兵衛
水野慶次郎
荒川藤兵衛
柳川梅次郎
吉川半七

書肆
小林喜右衛門
若林喜兵衛

蠣殼町水天宮前
板